

氏名	おおかど こうへい <b>大門 耕平</b>
学位(専攻分野)	博士(学術)
学位記番号	博甲第898号
学位授与の日付	平成30年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 先端ファイブ科学専攻
学位論文題目	<b>中学校教育における学業成績を構成する要素についての研究 学習習慣・学習意欲および学習環境ならびに道德観に着目した分析</b>
審査委員	(主査)准教授 来田宣幸 教授 桑原教彰 教授 野村照夫

### 論文内容の要旨

中学校教育において、生徒の学力や学習意欲などの状況を理解することは生徒を指導する上で重要な要素である。また、中学生の期間は内面的にも外面的にも多くの変化が生じる時期であり、その影響で発育発達上の様々な課題や困難な事象が発生する場合がある。したがって、中学校教育では生徒を理解することは重要であるが、中学生を対象としてその変化や生徒指導上の課題等について実践的な観点からの研究は少ない。そこで、本研究では、中学校教育における生徒の状態を把握するための尺度を開発し、横断的調査および縦断的調査の手法を用いて中学生の実態を明らかにすることを目的とした。この目的を達成するため、特に学業成績、学習意欲、学校・学級環境、教科学習、および道德観に着目し、多角的な視点から生徒を評価し、総合的な理解を促進することができるよう留意した。

本論文は、第1章において、中学生を対象とした現代的課題および研究上の動向と問題の所在、研究の目的について整理した。第2章では、中学生を対象とした横断的調査を実施し、家庭学習習慣因子と教科学習習慣因子の2因子から構成される学習習慣尺度を開発した。第3章では、第2章で作成した学習習慣尺度を用いて3年間の縦断分析をおこない、学習習慣の変化、学業成績との関係を明らかにした。第4章では、中国の中学生および中学校を研究対象とし、質問紙調査とヒアリング調査を実施した。質問紙調査では、中学生の時期において学習習慣が低下しない傾向が明らかになった。また、教師を対象としたヒアリング調査によって教育内容や家庭との連絡方法の充実など、教育上の効果をもたらしていると考えられる具体的な取り組みについて整理することができた。第5章および第6章では、数学および英語の教科に対する意識を定量的に評価する質問紙を作成し、3学年(3世代)に対する3年間の縦断分析をおこなった。その結果、数学と英語の教科に対する意識の変化の傾向を示され、また、学業成績との関係を示すことができた。第7章では、学習環境として学級いごち度尺度を用いて教師不在の場面における不安感と学業成績等との関係を明らかにした。第8章では、中学生の道德観に焦点を当て、スピリチャル尺度等を用いて新たな質問紙を作成し、中学生の道德観について明らかにした。

最後に第9章では、総合的議論をおこない、中学校教育において、中学生の学業成績に対する

学習習慣・学習意欲および学習環境ならびに道德観を定量的に評価することの意義や生徒理解、学校（学級）運営、教材開発の改善に活用することの重要性についての提言をおこなった。

## 論文審査の結果の要旨

本論文では、中学生期の生徒を対象として学校教育の枠の中でより効果的な生徒理解と生徒指導を実現することを長期的な展望として、そのために必要となる各課題に対して質問紙を用いた横断的および縦断的な調査やヒアリング調査を通して基礎的な知見を蓄積させ、生徒の発育発達の視点および学校教育学の視点から科学的根拠に基づいて論じている。

まず、研究の手法に関しては、先行研究レビューに基づいて質問項目が選択されており、また、データ収集において横断的調査として 300 名以上、縦断的調査として 100 名以上からの回答を用いて統計的手法に基づいた分析が行われている。対象校が限定されているなどの課題は認められるが、学力テストの結果など貴重なデータを用いている点などを総合的に勘案すると、研究手法上、大きな問題は認められず、適切な科学的手法に基づいて研究が遂行されたといえる。また、データの収集や分析および公表においては OECD ガイドラインに則った適切な運用がなされており、人権上の配慮についても適切になされていた。

次に、研究の新規性に関しては、学校現場における学力テストの結果を用いた分析は少なく、また、3 年間にわたって中学生を縦断的に調査し、関連する各変数との関係を検討している点においても貴重な研究成果であり、データとしての新規性は高いと評価することができる。また、得られた結果について、中学生の学習意欲が 1 年の春から秋にかけて急激に低下し、2 年の後半から 3 年にかけてやや回復することを横断的調査と縦断的調査から示したことは貴重な成果である。また、教科学習習慣と学力テストの間には正の相関がみられたものの、家庭学習習慣と学力テストの間には相関がみられなかったこと、中国の中学生では学習習慣の低下が観察されなかったことなど、知見としても重要な成果を示しており、いずれも新規性が高い研究といえる。

また、研究の有用性に関しては、本論文中で作成された質問紙はいずれも簡便に実施することができ、また、他のパラメータとの関連を含む多角的視点から妥当性が検証されており、今後、中学校の教育現場で使用することが期待できる。さらに、本論文の質問紙調査の結果から得られた様々な知見、例えば、英語教育では中学 2 年から中学 3 年にかけての英語に対する関心・意欲が学業成績との間に強い関係がみられたのに対して、数学では中学 1 年での数学に対する関心・意欲が学業成績との間に強い関係がみられた点など、教科による特性の違いを認識することで効果的な教育指導法を考案できる可能性が示されている点において、教育現場に対する有用性が非常に高いといえる。

さらに、本論文はある中学校の事例を中心とした研究成果ではあるものの、本論文の全体を通して実践された生徒の現状を把握するための様々な手法を用いて、学校あるいは学年全体の教師集団として教育実践を振り返ることは、他の教育機関に対しても大きな示唆を与えるものである。将来的には、学校教育界における様々な取り組みの発展に寄与することが期待できる研究であり、社会的意義が高い研究成果である。

なお、本論文はいずれも申請者が筆頭著者である査読付き国際誌へ掲載された 2 編の基礎論文と国際会議プロシーディングに掲載された 1 編の参考論文で構成されている。また、研究者倫理

に反する行為がないことを確認した。

- Kohei Okado, Hiroyuki Yoshida, Noriyuki Kida, Correlations between Changes in Study Habits and Academic Results in Junior High School Students - A Longitudinal Survey at a Private Junior High School. *Psychology*. 8(13): 2102-2113, 2017.
- Kohei Okado, Noriyuki Kida, Takeshi Sakai, Changes in Study Habits of Chinese Adolescents and Factors Supporting These Habits-Focusing on the Transition Period from Elementary School to Junior High School. *Psychology*. 9(5): 1081-1094, 2018.

#### 参考論文

- Kohei Okado, Hiroyuki Hamada, Noriyuki Kida, Development of Learning Habit Scale and Situational Analysis of Japanese Junior High School Student Learning Habits, Proceedings of AHFE 2017 (8<sup>th</sup> International Conference on Applied Human Factors and Ergonomics), *Advances in Human Factors in Training, Education, and Learning Sciences*. 161-171, 2017.

以上の結果より、本論文の内容は十分な新規性と有用性があり、博士論文として優秀であると審査員全員が認めた。